

板の間にむしろとカマスを敷き、寝るときには衣服のままカマスの中にはいり寝ることにした。最初の頃は帰国も早いと思い、食事の材料は手持ちのお金で購入していたが、後日には高粱が主食となり、海岸で昆布、ワカメを拾い、漁港に行き、明太の蔵物を貰い、海水を汲み、調味料にする毎日であった。

風呂にもはいらず着替えはなく、服や靴下は幾重にも継ぎあてをし、使用しているのでシラミがわき、天気の良い日はシラミ取りをするのが日課であった。正月前のある日、小生が盲腸で痛み苦しんでいるのを見かねた満州で薬局をしていた人がモルヒネをくれ、命拾いをしたことは一生忘れることはできない。三歳になる妹も栄養失調のためはうこともできなくなり、この頃、毎日のように栄養失調とチフスのため死ぬ人が出るようになった。二月より日本人に対して米の配給があるようになった。配給を受けると、帰国費用のため、一口も口にせず、すぐ換金するようにした。南鮮に行く船があることがわかり、国境を越えるために船賃として大人から赤ん坊に至るまで一人千円を支払う。四月二十四日深夜、漁船の

狭い船倉につめこまれ、船外に出ることは固く禁じられた。二日前に出た船が元山沖で捕らえられたとの情報があり、心配したがぶじ注文津の漁港に上陸すると白い粉を頭から服の中までかけられ、それから行き先々で白くなるありさまであった。

翌朝、米軍のトラックに便乗し、蔚珍へ。蔚珍より日本人乗組員の船で釜山に。釜山ではお寺で休息し、夕方日本行きの船に乗り、その晩は、夢にも見た祖国に帰れると思うと興奮して眠れず、朝方うつらうつらしていると、「見えたぞー」の声に起こされた。三歳の妹ははうことができなくなっていたが、よくぞ一人も欠けずに八人全員無事に仙崎港に上陸することができた。ときに、昭和二十一年四月二十八日であった。

## 敗戦と北朝鮮からの引揚げ

北海道 位田 邦夫

私達一家は祖父が日韓併合前朝鮮黄海道沙里院邑西里

に相当の資金を持って移住、薬店を開業、役場に融資するほどで功績がありました。引揚時の財産は店舗と敷地（五百坪ほど）貸家七軒と敷地、農地（六十町歩ほど）外に預金現金等は父死亡に付き不明、私を知っているのはこれくらいで私達兄弟姉妹は現地生まれです。昭和二十一年五月末祖父の出身地である三重県三重郡菰野町下村へ引揚げて来ました。一家八人の大家族で引揚げてからの生活が大変でありました。

以下終戦当時の記憶を書いてみます。

#### ソ連軍の進駐

八月十五日以後私達の生地、朝鮮黄海道沙里院の町は一か所に集結することなく自宅待機しておりました。他地区では例外なく一か所に集結した。待機中に店の商品である薬品は治安署が全部持って行った。何日であったかソ連兵がはいって来た。幼な顔の少年兵、女の兵隊、頭丸刈りで綿入服を着た中国かモンゴルか見分けのつかない兵隊。頭髮は黒、灰色、茶色、金髪あり雑多である。手には皆自動小銃を持っている。次から次へと行進してくる大型戦車、新車の大型車に積まれたロケット砲部

隊、大型トラックにジープの行列、みな初めて見る物であった。

何日か日が過ぎて清津から日本行の船が出ると話が飛び騙された多数の人々がシベリア行となった。

街には自主独立万歳のスローガンが溢れ、口を開けば独立歌の斉唱であった。政治犯の刑務所帰りが幅をきかせ重要ポストを握った。代わって警官、裁判官、所長等有力者は刑務所に入れられた。ロシア語の出来る先生もウルサイと入れられてしまった。

#### 第一回引揚の失敗

二十年十一月着のみ着のまままで逃げ出した邦人は三八度線でストップ、国境司令官はモスクワ特別指令で一人も越境させないと頑張っていた。父の言った通りであった。道を塞がれた邦人は忽ち生活に困り寒さと飢えと発疹チフスの流行で弱い者はバタバタと死んで行った。私達は幸い叔父の家まで行き翌日沙里院へ引返した。町にはソ連軍の赤い軍票が流通しだした。毎日物価は上がる。朝鮮人の知人が言った「あなた方は日本政府をあまりにも信用しすぎた。あなた方を守るべき軍隊は

先に帰ってしまった。帰る前は朝鮮人を徴用したり勤勞報國隊に入れてただで使った。今度はあなた方が引張られる番となった」使役の初めは安上がりでよいと思つたらしいが永くなると自分の職場がなくなり早く帰国しろと言ひ出した。

やがてソ連軍による供出米の集荷が始まりソ連軍トラックに日本人が三、四人上乗りして農村を廻つたが重量も品質も調べない。村を廻るほどに倭が小さくなり中には糠、土等が入つたのがあつた。二俵はまったくの土俵であつた。

農民自身がトラックに積み込んでくれる物ほどまやかし物であつた。二、三回往復するとソ連運転手は「倭はごまかし酒に変えてその日の仕事は終わりであつた。

独立独立と騒いでいるうちに農地開放が行われ地主は土地を失つた。労働者以外は敵だと叫ぶ声が聞こえてくるようになり独立も決して甘くないと鮮人も悟り出した。混乱も少し治まると南鮮から色んな物が闇ではいり出した。その筆頭はベニシリンで一本五千円であつた。

ソ連軍は農学校を病院にした。戦争もないのに毎日の

ように死者が出て裏山に埋められ赤い十字架が立つた。スコップの柄も赤、掲示板も赤、何もかも赤である。ソ連軍の食事は黒パンと油でドロドロのスープ、黒パンは魅も入っている、黒くて酸っぱい、パン屋にいわせるとこの作り方ならなかなか腐らないそうだが、記述が後になつたが。

ソ連軍が進駐以来遊び場がないために兵士が騒いで困ると言つて治安署は遊廓を作ることにした。日本人の娘をと考え鈴木日本人会々長を呼び協力を頼んできた。鈴木会長は「そのような協力は出来ない。無理にもと言つたら私はここで腹を切る。次の日本人会々長に我が意を伝えてくれ」と頑張つた。氣迫におされこの件は終わりになつた。この鈴木さんは普段おとなしい農機具商で鮮人にも信用があつた。安全なときは威張り、ことに臨んでは逃げる者と対比し眞の勇者と称すべきであろう。掌を合わせ感謝したことであつた。

いよいよ帰國の途へ

昭和二十一年五月となり行動しやすくなつたので沙里院に残つていた全員が引揚げることになつた。治安署

駅、ソ連軍司令部に相当額の金を使い特別列車を出して貰う。本線は通れないので黄海線廻りである。田舎駅鶴見で下車、鉄道警備隊、治安署、国境警備隊に調べられる。その都度袖の下である。鮮人の道案内人を雇い荷物を運ぶ牛車も雇い二十八度線の手前山道を進む。途中何度も牛車曳きが止まっては値上げの交渉が始まる。人の足元を見て山賊共と思うが栓なし。朝鮮では葬式の時墓場まで行くのに棺を担いだ大勢の人足が途中何度も棺を下ろして動かない。その度に酒を吞ませ景気をつけては進む風習がある。明け方三十八度線と書いた掲示板を見る。青丹駅に着いたのである。解放されたような気分になる。ここから無蓋貨車で開城に到着、ここからお世話をしてくれるのは日本人会の人達であった。

頭からDDTを浴びて京城南山の寺に収容された。夕食はコーリヤンの水煮をブリキ缶のコップ半分、食欲は出ない。鮮人が色々の食物を売りに来る。本町通りに出してみるとパン屋にふかふかの焼きたてがある。値段は非常に高く物価は一般的に北鮮より高い。翌日竜山駅より貨車に乗り釜山着、途中至るところ李承晩博士万歳の宣

伝であった。

引揚船はリバー艦で士官室に一家八人入れたのはよかった。食事は大豆の水煮だけ、ボーイの話では一皿五十円で米飯福神漬付もある由、サイドワークにやっているとのことであった。五月二十五日仙崎港に到着。

日本に帰ってからもっと大変だった。食料は不足、売る物もない。信用も何もない。

またあとになったが京城の収容所で逢った南山の寺で這って動いている人がいた。母親を背負って三十八度線を越えるまで歩き続け遂に立てなくなったとのことであった。我が一家にも祖母がいたのであるが丈夫であったので幸いであった。多くの難民の中でも私達は比較的に引揚げた方と感謝しています。

## 我が家の運命を変えた戦争

北海道 谷 口 雅 枝

私達一家がサラリーマンだった父の任地、朝鮮平安北